

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 田中 竹史

研究課題名	ことばを通じてヒト科ヒト属の認知能力を探る
研究目的及び研究概要	0. 研究の背景 Mora et al. (2011) によると、地球上には真核生物が約874万種存在すると推計されている。それらの多様な生き物のうち、ヒト（ヒト科ヒト属）は唯一ことばの使用が可能な生物種であり、ことばはヒトという存在を際立って特徴づけている。たとえ進化の隣人であるチンパンジー（ヒト科パン属）のように、学習能力が高く様々な点でヒトに比肩しうる一のみならずある側面においては凌駕するような一認知能力を持つ生物種であっても、音声言語であれ手話言語であれ言語の使用は不可能であり（松沢 2011）、どんなに優れた人工知能（AI）であっても自然言語を理解することはかなわない（酒井 2022, 川添 2021）。したがって、言語研究はヒトという生物種の特質を明らかにするのに最も有効な手段であり、とりわけ、ことばの獲得や習得に焦点を当てた研究（単一言語使用環境における母語獲得、複数言語や多言語使用環境における母語獲得、子供や大人による第二言語、第三言語習得、手話言語の獲得・習得、失語などの言語障害、認知能力に機能不全のある障害者による獲得・習得、など）は認知科学の領域において重要な地位を占めている。 1. 研究の目的 本年度は前年度に実施した幼児による動名詞の獲得研究を経験的な視点から検証を行うと同時に、大人の文法の持つ統語構造、特に与格動詞と受益動詞に焦点を当てた統語構造の追及も行った。 また、引き続き、我々の認知能力の一部である言語機能というヒト固有の生物学的な共通基盤に対する理解を重視した外国語教育の可能性も探っていく。この立場は複言語主義と呼ばれ、母語を活用し「ことばへの気付き」（linguistic awareness）を育み、その気付きを基に外国語を学ぶというものであり、Council of Europe（2001）以降大きく変化した外国語教育とも共鳴するものである。
研究実績の概要	2. 得られた成果 本研究では、与格動詞と受益動詞が選択するNP-PP型の構文について、二種類の動詞は基本的に同一の統語構造を持つと主張するLarson（1990）、Snyder（2003）、Levinson（2005）などとは異なり、二つの動詞類は異なる構造を持つと主張する。取り上げる言語現象は、副詞againの回復解釈と反復解釈という二つの解釈における相違、代名詞の束縛現象（主語NPから目的語NP、主語NPから与格PP・受益PP、目的語NPから与格PP・受益PP）、再帰代名詞の束縛現象（主語NPから目的語NP、主語NPから与格PP・受益PP、目的語NPから与格PP・受益PP）である。これらの現象において、与格動詞の選択する構文に生じるto-PPは項としての振る舞いを示すが、受益動詞の選択する構文に生じるfor-PPは、付加詞としての振る舞いを示す。それゆえ、与格動詞の選択するNP-PP構文と受益動詞が選択するNP-PP構文は異なる統語構造を持つと議論した。 外国語教育に関しては、日本の英語教育においては、単一言語主義に基づく教授法が事ある毎に主張されるが、この明治時代以来の旧弊的な教授法は、商業的な動機や特定の政治的動機は持つものの、教育的根拠や政治的根拠が極めて脆弱であり、学習者の既得言語である母語を最大限活用した複言語による教育が望ましいことを議論した。 3. 研究実績等 上記研究の成果についてはその一部を発表や論文、その他の媒体で公表する予定である。